

別荘地・軽井沢の発展過程の研究 その三

— 伝えられるシヨール師の「業績」 —

江川良武

カナダ生まれの宣教師・シヨール (Alexander C. Shaw) (以下、シヨール師と称する、息子達と区別するため、彼にのみ敬称を付す) は軽井沢では大きな存在である。彼が軽井沢に最初の別荘を設け、それが宣教師を中心とする避暑地の基礎を作ったと、多くの雑誌・書籍に書かれている。そして観光関係のガイドブックやパンフレット類に必ずといって良いほど、時に「恩父」の敬称を付してその名が記述され、毎年シヨール祭が開催されるとともに、最近では軽井沢町の条例⁽¹⁾を含む行政文書に至るまで枕詞の如くシヨール師の名前が記されるようになっていいる。確かにシヨール師がディクソン (James M. Dixon) と共に軽井沢に來た頃から、外国人避暑客がいわば爆発的に増えたのは事実である。二人の來訪二年後の明治二十一年には一五〇人、四年後の明治二十三年には二〇〇人を超える外国人が軽井沢で避暑生活を行って

いる。⁽²⁾ さらに一年後の七月には当時唯一の覇権国家であった大英帝国の在日公使館別荘が軽井沢に開設されている。シヨール師やディクソンの來訪が何らかの契機を与えたことは間違いないが、彼らの具体行動の何が後の繁栄をもたらしたのかは明瞭でない。シヨール師の場合、最初に別荘を建てたことが功績とされているように思われるが、それが別荘地の発展にどのようにインパクトを与えたかまで具体的に説明されなければ答えにはならない。個人の名を単に挙げることによって事を済ませるといふ姿勢は「思考停止」と著者は考える。

多くの別荘地は、宣教師仲間や大学人などの会員制組織あるいはデベロッパなどの強い開発意志のある法人によって拓かれた。軽井沢も大正中期以降の発展期には法人が大きな役割を果たしたが、それ以前の生成期には、「開発中

心」が存在しなかった希有の別荘地である。⁽³⁾にもかかわらず、何故にわが国を代表する別荘地となったのかは謎のまま残されている。そこにシヨール師の「偉大な貢献」があったという「お話」が生まれる背景があると思われるが、真相はどうであったのかを本研究では探りたい。

一 シヨール師と上司・ビカステスの人となり

後の議論の必要上、ここでシヨール師本人及びこれまで軽井沢で注目されることの少なかった彼の上司ともいふべきビカステス (Edward Bickerseth) の経歴、人となりを検討しておく。

シヨール師は一八四六年にカナダ・トロントに生まれ、明治六年に英国海外福音伝道会 (英文略称 SPG) より日本に派遣された聖公会の宣教師である。明治一二年に彼が中心になって設立を進めていた聖アンデレ教会が落成し、以後、この牧師を終生勤める。明治一四年に英国公使館付きの牧師となる。この職務は公使館関係者の英国聖公会信徒への宗教サービスを提供する者ということであって、必ずしも教派の高位者を指すものではない。聖公会は英国系と米国系に分かれるが、シヨール師は前者に属する。聖公会の最高位者は主教であり、英国系については明治一九年にブール (Arthur W. Poole) からビカステスに変わった。シヨール師

は明治二二年、大執事 (Archdeacon) となったが、これは上司であるビカステス主教に任命されたものである。軽井沢との関係でシヨール師を論ずる場合、彼を事実ではない貴族の出とし、彼の主張によって信越線の工事が再開したとの所説まであるなど、彼を実態以上の実力者と見る傾向があるが、聖公会内での立場は斯くの如くであった。なお、「貴族」についてはシヨール師の三男の R・D・M・シヨール (Ronald D. M. Shaw) が否定し、「信越線の工事の再開」は開通翌年に日清戦争をはじめたことからわかるように、軍事的観点からのものであることはいうまでもない。

シヨール師の人となりであるが、佐藤不二男は「軽井沢の駅に着いて留次郎さん (木内) の車にのって町に入ると、日本銀行の判の押しである晒の袋から、五銭の白銅貨をつまみ出しては、聖句のカードと混ぜて遊んでいる子どもたちにはらまいた。」⁽⁷⁾とある。到底、是とすることの出来ない行為であるが、人は矛盾に満ちたものである。以下に見るように、全体としては信頼されていたと見て良いだろう。英国公使夫人のフレイザー (Mary C. Fraser) はシヨール師の属する英国聖公会に批判的な人であったが、次のように記している。「昨年、私自身、悲惨な話を耳にしました。国じゅうがほとんど飢饉に近いものに見舞われた時のことです。稲が凶作で窮乏はひどいものでした。救民小屋が各

地につくられ、東京市内のさまざまな拠点からスリーブとパンが送られました。そのような拠点のひとつをもっとも能率よく切りまわしていたのは公使館付きの国教会の牧師であるS副主教でした。……S夫妻は非常に慈悲深く、困った人はみな夫妻の家に飛び込み、かならず保護と慰めを見出すのです⁽⁸⁾。このS夫妻がシヨ一師であることは間違

いない。また信濃の布教者であった牛山雪鞋は、「私はこの長老さん(M氏、シヨ一師のことではない―著者注)と衝突してからというもの、つくづく西洋人と共に働くことがいやになってしまった。……はなはだしく西洋人に対する私の感触を害していた矢先だからたまらない。正直に告白する。私はじつにもう西洋人の顔を見るのもいやになった。」⁽⁹⁾とするが、シヨ一師については好意的に書いている⁽¹⁰⁾。ライト(William B. Wright)はシヨ一師と一緒にSPGから派遣された宣教師である。ライトは都市の複数箇所で講義所と英語学校を設け、農村部にも伝道の手を拡げるなど手広く活動した。シヨ一師はこれと対照的に芝の聖アンドレ教会に活動を集中している。良し悪しは別にして、広く活動範囲を広げるよりも、じっくり一つの教会に集中して成果を上げるタイプだったようである。第一回のシヨ一祭で講演した元日本聖公会福田聖公会牧師の垣内茂氏は、同僚ホッパー(E. C. Hopper)が見たシヨ一師の人となりを紹介し

ている。それは、信徒からの信望は厚いものの、どちらかといえば内向的なあまり人付き合いの得手ではない姿である⁽¹¹⁾。他でも「恥しがりやの内気な人物」との評価がある。これらより判断すれば、シヨ一師にカリスマ性があったとは見えず、個人的な影響力によって多くの外国人を軽井沢に呼び寄せたとは考えにくい。

ピカステスは一八五〇年にロンドン近郊で高位聖職者の家に生まれた。シヨ一師より四歳年下であるが、若い頃から囑望され、明治一〇年にはインド・デリーにて布教を開始、赫々たる成果を上げた。軽井沢との関係で特に注目すべきと思われるのは、デリー北方の高原都市・シムラ(Simla)との縁である。インドに植民した英国人は、ヒル・ステーションと呼ぶ高原避暑地を各地に作ったが、シムラこそは、明治七年より英国インド総督府の夏の政庁となるなど、ダーズリンとともに代表的な避暑地であった。ピカステスはここで布教のための講義を行い⁽¹²⁾、またここを出発点にヒマラヤの奥地まで旅をしているから、シムラでの避暑生活も体験していたはずである。彼はインド滞在中に赤痢にかかり、結局、それで命を失うことになる後遺症に苦しむ。赤痢には細菌性とアメーバ性があり、後者だったであろうか。それが悪化し、医者⁽¹³⁾の厳命で明治一五年にインドを去り英国に帰国する。しかしインド在留のキリスト

教関係者は彼の才能を惜しんでインドに戻そうとし、夏期をシムラで過ごすことの出来るポストを用意するなどを策したが果たせなかった。⁽¹⁵⁾ 明治前期の在日外国人は、箱根や伊香保のような既存の旅館を利用して避暑を行っていたが、⁽¹⁶⁾ 所詮は旅館主の管理下の生活である。自分達が主人となり、思いのままに運営する「ヒルステーション」を作りたいとの願望が彼らにあったとしても不思議ではない。しばしば避暑地・軽井沢のモデルは英国のリゾート、バースやブライトンであるとの所説が聞かれるが、それらは高原リゾートと立地やライフスタイルなどが全く異なり参考になり得ない。ヒル・ステーションこそが高原避暑地の嚆矢であるが、その形成にあたってはインド総督府の権力、資本が与っており、⁽¹⁷⁾ 独立国・日本にその経験がそのまま適用できるものではない。しかし軽井沢を避暑地とするに当たってシムラはモデルとはなつたろう。ビカステスはこれまで知られる限りで、草創期の軽井沢と海外の先進避暑地・ヒルステーションの双方を結ぶ唯一の人物である。

ビカステスは英国に帰国し聖職をしばし勤めた後、明治一八年一〇月に日本行きを決意、翌一九年四月に長崎に上陸、五月に上京、六月末まで東京のシヨ一師宅に寄留する。先にも触れたように日本における聖公会の伝道団体は当時、英国系と米国系に分かれていたが、信徒にすれば教義こそ

が大切であって、どちらかに管轄されるというのは愉快なことではない。こうした配慮もあったのであるろう、世界主教会議（ランベス会議）では同一地域を聖公会の異なる団体が管轄することを避けるとの決議が為されていた。これを受けて米国聖公会主教ウィリアムズ（Channing M. Williams）とビカステスの前任者プールは、東京居住は米国聖公会主教に限るという協定を結んだ。英国聖公会のプール主教は神戸に在住したのである。ビカステスはこの協定を一方的に破棄し、シヨ一師の家を皮切りに以後、東京在住を強行する。居住問題のみならず、以降、「英国国家権力と表裏一体の関係にある英国国教会」⁽¹⁸⁾の一支部、日本聖公会における英国のヘゲモニーを確立するため、日本人信者や米国聖公会の猛反発の中で、豪腕を発揮する。⁽¹⁹⁾ シヨ一師が軽井沢で避暑を始めるのはビカステスの来日直後からであるが、上司であり極めて強いカリスマ性・指導力のある彼の影響はなかったであろうか。

二 軽井沢の「発見者」

旅館つるやの主人・佐藤孝一の著「かるいざわ」は、避暑地の揺籃期を地元で体験した者によるはじめての刊行物であり、その後の多くの本や記事・論文にとって、これ以上に依拠するものがない重要な文献である。これにおいて

佐藤孝一は「軽井沢に足を止めた最初の外人はシヨールとデクソン氏であった⁽²⁰⁾」とする。なおその文に続く括弧書きで「明治一六年、独人ドクトル、ジッセ、ラトゲン氏が内地旅行の途次、此の地の風色の泰西的なるを愛でて一箇月間三度屋（佐藤又八）方に滞在したとも云ふ（傍線は筆者）」とあり、含みを持たせてはいるが、シヨール師とデクソンをして、軽井沢の発見者と見なしたいとの気持ちが表示されている。R・D・M・シヨールは「父は発育盛りの子供たちを蒸し暑い東京から、毎夏少しの間でもすがすがしい涼しさの環境のこの高原につれて来ようと思った」とし、軽井沢がシヨール一家にとって初めての避暑地であったような一文を残している。大方の軽井沢に関する解説書も同じように、外国人はあたかも軽井沢で初めて涼しさに遭遇した一発見した⁽²¹⁾との書きぶりである。

避暑地としての軽井沢を「発見」したのは決してシヨール師達ではない。英国公使館通訳官であり後に公使となったアーネスト・サトウ (Ernest M. Satow) が、他の地域との比較において軽井沢の特徴を最も良く知り、それを外国人に広く知らしめた人物であったことは確実である。サトウの著述を数多く訳出した庄田元男は、「日本旅行日記²」の注書きで「デイクソンもシヨールもこの情報に基づいて軽井沢を訪れた」としている。「この情報」とはサト

ウらによる「中央部・北部日本旅行案内⁽²⁴⁾」のことで、初め総合的な外国人向け旅行案内書であった。ここで軽井沢は、涼しく、蚊がいなく、良好な宿があり、散策や登山、野花観察の機会に恵まれているなどとして、避暑地として優れていることが紹介されている⁽²⁵⁾。この旅行案内が刊行された際、当時の在日外国人の間に雑誌として浸透していた「ジャパン・パンチ」は、大ニュースとしてイラスト付きで刊行の事実を報じている。待ち望まれていた案内書が、日本文化研究の第一人者にして、外交官の特権と恵まれた体力を生かし、他に追従を許さない豊かな旅行体験を持つサトウによって、ようやく刊行されたという喜びが表れている。

「かるいざわ」の翌年に坪谷によって書かれた記事に、「デイクソン氏は筆を執って（軽井沢のことを―著者注）盛んに賞賛の辞を、新聞や、雑誌や、著書の中へ書いて紹介すると、シヨール氏もまた頻りに知友の宣教師の間に紹介したから、軽井沢の名は忽ちに外国人の間に知られて……⁽²⁷⁾」とある。しかし、具体の雑誌名や著書名などは何ら報告されておらず、また今日に至るも知られていない。サトウらの「中央部・北部日本旅行案内」を超える影響力があったとは考えられない。

サトウは、シヨール師達が軽井沢に来る前に前記旅行案内を第二版まで刊行しているが、それ以前に四回にわたって

軽井沢地方を訪れている。初回は明治六年一月一日、九州からの帰路、軽井沢に泊まっている。⁽²⁸⁾明治一〇年九月一日には浅間山に登山している。ただしこの時は軽井沢に泊まっていたはいない。⁽²⁹⁾明治一年八月一日、飛驒旅行の帰途、軽井沢に泊っている。明治一五年一月にも、草津を経て碓氷峠を越え帰京しているが、この際、軽井沢三度屋に泊まっていた。⁽³⁰⁾軽井沢についてのサトウの記述はこうした実績に基づいている。

シヨール師達が軽井沢に来た時期は明治一八年又は一九年とされる。実はこれ以前から外国人達が避暑のため軽井沢に長期滞在している。信濃毎日新聞・昭和一年八月九日付は、「軽井沢発展座談会」を紙上でやっているが、その中でマッコイ (Rollin D. McCoy) は明治一三年、すなわちシヨール師、ディクソンが軽井沢に来た七、八年前にジョセフィン・ラシン・ドレーパー博士 (綴り不詳) が軽井沢に滞在したとある。ドレーパーの経歴は良くわからないが、座談会の年に挙行された軽井沢五〇年祭で冒頭のお祈りをしているから、宣教師だったのだろう。サトウは、旅籠・三度屋の主人の談話として、明治一四年に医学校から来た二人の教授が二ヶ月部屋を借りたことを明らかにしている。⁽³¹⁾二年後の明治一六年についても、先の佐藤孝一の記述のようにドクトル・ジッセ、ラトゲンが一ヶ月間三度屋に滞在

した可能性が高い。明治一四年、明治一六年の滞在は、いずれも二人であり紛らわしいが、年代が明らかに異なるからそれぞれ別の滞在と見て間違いないだろう。サトウのいう明治一四年に滞在した医学校の二人の教授とは、当時の東京大学医学部において来日直後あるいは離日直前の者を除くと、いずれもドイツ人のベルツ (Erwin Baetz)、ゼレスニー (Zelazny)、ティーゲル (Ernst Tiegel)、ディッサ (Joseph Diess) のいずれかに限られる。⁽³²⁾ベルツは臨床医であって忙しく、長期の休暇を取っていないから対象外である。ゼレスニーはドイツ語の教師である。残りのティーゲルとディッサは共に解剖学担当であり、⁽³³⁾基礎部門であるだけに時間的余裕も比較的あったと思われるから、この二人であった可能性が高い。

佐藤孝一がほのめかす明治一六年に滞在したジッセとは前記のディッサである。ラトゲンとは、Karl Rathgen、であり、明治一五年から二三年までの間、東京大学文学部 (後には帝国大学法科大学) における初代の政治学教授を勤め、折からのドイツ熱の風潮を背景に、学問の府の東京大学から高等官吏養成機関たる帝国大学への体制変更に大きな影響を与えた人物である。なお帰国後は、かのマックス・ウェーバーの後任としてハイデルブルグ大学に招聘され、ハンブルク大学が創設されるや初代学長に就任するなど

「大物」学者であった。⁽³⁴⁾

シヨ―師達が来るまでの外国人の軽井沢夏期滞在の記録があるのは、上に見たように明治一三年、明治一四年、明治一六年のみであるが、その他の年においても既に外国人の避暑地であった可能性が高い。なお、前記信濃毎日新聞の前日・八月八日付の記事によれば、シヨ―師、ディクソンの二人が避暑を始めたとする明治一九年には、実は彼らだけではなく、ノックス、キャプテン・ジェームスなどの外国人も一二、三人が滞在していたという。また別の紙面で、後に宣教師となったチャップル (James Chappell) は、同年に家族と共に浅間山に登り、その後、局の側の旅館に約一週間滞在したと述懐している。⁽³⁵⁾ 局とは郵便局であろうから、旅館は脇本陣「佐忠」であろう。明治一九年においても、既に多くの外国人が知る土地であった。

さらに軽井沢を経過した旅行者となると枚挙にいとまがない。国会図書館蔵書など、比較的容易に読むことの出来る伝記や旅行記によって得た人物を以下に年代順に列挙する。三宿とは軽井沢高原内の軽井沢宿、沓掛宿、追分宿を指す。

明治二年八月に、英国公使館ウィリアム・ウィリス (William Willis) は越後に赴く途中、軽井沢に泊まっている。⁽³⁶⁾

明治三年五月に英国公使パークスは日光を訪れたが、その後、軽井沢地方に廻って浅間山に登っている。⁽³⁷⁾

明治三年、ウェブサイトの「軽井沢の歴史・二六」は、「軽井沢よもやま町公民館だより」の島崎の記事を引用し「追分宿脇本陣油屋の検名簿(宿帳)」に、三月一四日宿泊の米国人ホローランから始まって、英国・伊国公使らの往来などが記録されている」としている。⁽³⁸⁾ 穴戸も同年春に米国、英国、仏国、伊国、デンマーク、プロシヤ、スイスの七ヶ国人が宿泊又は休憩したと同検名帳にあると記している。⁽³⁹⁾ なお、著者は島崎の記事を確認できていない。

明治四年八月、サンドウィズ (J. H. Sandwith) とその友人達は明治四年八月に名古屋方面から東京への旅行の途中、軽井沢に宿泊している。⁽⁴⁰⁾

同じく明治四年八月に、英人新聞事業家・ブラック (John R. Black) は友人の英人三名と共に甲府、諏訪の帰路、軽井沢に泊まっている。⁽⁴¹⁾

明治六年八月、大学南校などで教えたグリフィス (William F. Griffiths) は姉マーガレットとともに東京、静岡、京都、福井、金沢、新潟、長野、群馬を経て、東京に戻っている。⁽⁴²⁾ 経路から見て三宿のいずれかに泊まったのは間違いないから。

明治六年にフランスの艦長、デシャルメ (Leon Deschar-

Engel) は草津温泉を訪れ、詳しい報告書を残しており、⁽⁴³⁾ 軽井沢にも寄った可能性がある。

明治七年に來日し、九年に離日した地理学者・ライン (Johann J. Rein) は、サトウらによる「中央部・北部日本旅行案内・初版」における浅間山の登山案内の一部を提供している。同書は、浅間山の巨大な噴火口について『V. ドラッシュはその直径を千⁴⁴⁾と推定しているが、私の見る限りそれ程あるとは思えない』と記述している。時期はわからないがラインとドラッシュなる人物が浅間山に登ったのは確実である。

明治八年七月、工部大学校教師・マーシャル (D.H. Marshall) は東京から京都に向かう途中、浅間山に登っている。この際、軽井沢に宿泊している。⁽⁴⁵⁾

明治八年十一月、我が国の地質学の礎を作ったナウマン (Heinrich E. Naumann) は甲信地方を調査し、この際、浅間山に登っている。明治九年にも軽井沢を通過しており、三宿のいずれかに泊まったことは確実である。⁽⁴⁶⁾

明治一〇年五月、鉄道技師、ホルサム (G. Holtham) は東京から伊勢、大阪への旅の途中、追分宿に泊まり、浅間山登山を果たしている。その際、宿の戸に「Hotel for foreigners」と表示されていたとの記述は重要である。⁽⁴⁷⁾ 外国人の宿泊がそれまでにもかなりあったことを裏付けている。

明治一〇年、工部省工学家のお雇い教師であり地震学の基礎を作ったミルン (John Milne) は浅間山の学術登山を行っている。⁽⁴⁸⁾ 一九年にも訪れており、いずれも沓掛を基地にしている。⁽⁴⁹⁾

明治一二年一〇月、北極海航路 (北東航路) の開拓に成功したノルデンショルド (Adolf E. Nordenskiöld) は浅間山登山をし、追分に泊まっている。⁽⁵⁰⁾

明治一四年六月、英国王室地理学会特別会員のクロウ (Arthur H. Crow) は追分に泊まっている。その前日、浅間山登山を試みたが天候が悪く中止し中山道を東京に下った。軽井沢を、「このほか美しい村である。」と賞賛している。⁽⁵¹⁾

明治一六年七月、火星観測で有名なローエル (Perceval Lowell) は、東京帝大テリイ教授とともに中部山岳地方、日本海側の地方に出かける。⁽⁵²⁾ このテリイ教授とは東京帝国大学法科大学教授の Henry T. Terry と思われる。この際、三宿のいずれかに泊まった可能性が高い。なおテリイ教授は後述の「外務省資料」の明治三〇年報告によると、

明治二九年頃、軽井沢で別荘を取得している。

明治一九年八月、わが国初の横浜水道を完成させたパーマー (Henry S. Palmer) は友人と伊香保経由で浅間登山を行い、草津、白根山に向かっている。ただし三宿には寄っ

ていない。⁽⁵⁵⁾
 同じく明治一九年八月、フランス領事館代理のグダロー (Gustave Goudareau) は軽井沢を通過している。上田を朝出発し、その日の内に横浜に帰着しており、三宿には泊まっていない。⁽⁵⁴⁾

以上は、繰り返すが比較的容易に読むことの出来る伝記や旅行記によって得たものである。渡辺京二著「逝きし世の面影」⁽⁵⁵⁾やA・H・パウマン著「外国人のロクス・アモエヌス『箱根』」⁽⁵⁶⁾などによればこれ以外にも膨大な旅行記があり、今回、調べた文献はその一部に過ぎない。また明治一〇年にアサモンキチヨウを発見したブライア (Henry J. S. Pryer) など、浅間山麓を対象とする昆虫・植物探索者も少なくなかったが、この分野も含めていない。にもかかわらず、来訪外国人の数は確実なものだけで三〇人近くに上る。伝記や旅行記を後世に残した旅行者は全体のごく一部だったろう。また明治三二年まで、外国人は国内を旅行するにあたって旅行免状が必要であったが、その交付件数は、明治八年度が一三六六、一三年度が一七三三、一四年度が一八一八、一五年度が一四〇九人、一六年度が一五七九人、一九年度が一七八〇人に上る。⁽⁵⁷⁾中山道は、当時、東海道に次ぐ幹線道路であったから、控えめに見てもその数%は軽井沢へも来ていたであろう。これらを勘案

すればシヨ一師、ディクソンに先立つ軽井沢来訪者は数百人を超していた可能性がある。シヨ一師やディクソンより前に軽井沢を訪れた外国人は大勢いたのである。

三 シヨ一師、ディクソンが軽井沢に来た目的と時期

佐藤孝一は「明治一九年四月シヨ一、デクソンの二氏は、相前後して(内陸旅行の途中)此の地を過ぎ、山容野色の如何にも泰西的なるを見て、親しく土地の状況を視察して帰り、再び同年七月上旬に、二氏何れも家族を伴って来たり、八月下旬迄滞在した。」と書いている。⁽⁵⁸⁾シヨ一師の次男N・R・シヨ一 (Norman R. Shaw) も同年の春に父と兄弟で軽井沢を訪れたとする。⁽⁵⁹⁾ところが三男、R・D・M・シヨ一は、「アレキサンダー・クロフト・シヨ一(後の日本聖公会南東京教区の大執事)が聖職者でない友人と歩いて信州に旅したのは一八八五年のことでした」と書いている。⁽⁶⁰⁾これは明治一八年のことであるから佐藤孝一のいうより一年早い。佐藤孝一は、シヨ一師が一九年四月に来て三月後の七月に避暑を始めたとする。佐藤孝一の弟、佐藤不二男はシヨ一師が「ディクソン氏と共に布教の途中、軽井沢に立ち寄った」とする。共に軽井沢を偶然に見つけたとの文脈であるが、事実は先に見たように、既に外国人に良く

知られている土地であった。シヨ一師達が春に軽井沢に来たのは単なる視察ではない。宿舍の借り上げや土地の取引にまで打ち合わせが行われ、それから三ヶ月の内に、いわばあわただしく「避暑」が始められたのである。軽井沢の人々にとっては、短い間の立て続けの一連の出来事という鮮明な記憶と共にあったのであろうから、錯誤があったとは考えにくい。春の「視察」も明治一九年であったはずである。ところで宍戸はシヨ一一家が長期休暇で明治一七年晩夏に離日し、翌年一〇月に日本に戻ってきたとする。宮原は、宍戸の説を受け、シヨ一一家は明治一八年夏には日本にいなかったから明治一九年とした。⁽⁶²⁾しかし横浜で刊行されていたThe Japan Weekly・一八八四年一月一日付は、シヨ一一家はその日すなわち明治一七年にCity of New York号で横浜に到着したことを報じており、宍戸の言うより約一年早い。著者も明治一九年説を採るものであるが、明治一八年にシヨ一師が日本に不在だったことを根拠とするものではない。

日本女子大学教授であったフィリップス(Elizabeth P. Humes)は、シヨ一師について「氏は明治七年、浅間山登山の時、此処を過ぎて痛くその位置の卓越なのに打たれ、一一年再び軽井沢の地を訪ふて、善光寺詣り常宿の、古い旅館を買い受けた。」とする。フィリップスはシヨ一師が亡

くなる約半年前に来日、約一年間滞在したのみであって、年代の数字について信憑性に疑問は残るが、シヨ一師が早い時期に当時の外国人に人気があった浅間山登山をしていたとしてもおかしくない。

シヨ一師が軽井沢に来たいきさつについて、諸本で多少の相違があるが、共通するトーンは「東京の夏の暑熱に耐えかねていたが、涼しい軽井沢をたまたま知ることとなった」である。当時、カソリックの宣教師に夏休みは認められていなかったが、プロテスタントの場合は、その取得如何は当人達の自主性に任されていたようである。しかも多くは宣教師であると共に、正式に夏休みが認められた学校の教師を兼ねていた。そして、大半のプロテスタント宣教師は箱根を中心に避暑生活を送るのを常としていた。⁽⁶⁴⁾デイクソンの場合、明治一五年の夏に、箱根より富士山に登ったというサトウの記述があり、箱根の快適さを体験していたことは間違いない。シヨ一師の場合も明治六年に来日して以降、一〇年以上にわたり東京の暑熱に耐えていたとは考えにくい。もし転地して避暑生活を送るのを常としていたなら、追求されるべきは、これまで使っていた避暑地から何故、軽井沢に移動したのかということである。東京と比べた涼しさに軽井沢行きを求めるとは適切ではなく、また軽井沢がスコットランドに似ていたからとの説も

あるが、実は箱根もスコットランドなどそれぞれの外国人の母国に似ているとされており、^(65・66) 軽井沢だけがそうだったというわけではない。

通説によるとシヨ一師は明治一九年に軽井沢に来たが、それは避暑のためだったとされる。しかしR・D・M・シヨ一はこれに疑問を投げかける文を残している。すなわち「私は家族の内ではじめて軽井沢に連れて行って貰いました。確か四才の一八八七年（明治二〇年）のことでした。父は自分の別荘の建築の進み具合を見に出かけたのでした。⁽⁶⁷⁾ これによるとシヨ一師が家族を軽井沢に連れて行ったのは明治二〇年であって、明治一九年の軽井沢行きは「建築の進み具合を見るための「用事」であり避暑ではなかったことになる。ここでシヨ一師の明治一九年の家庭状況をしてみる。シヨ一師の父が前年・明治一八年の末に長女に伴われて来日、長男・シヨ一師の家で暮らし始める。心臓を病んでいた上に、これまで経験したことのない度重なる地震に遭遇し、すっかり神経を痛めていた。⁽⁶⁸⁾ そして中風となり、一年余の明治二〇年一月に東京で他界する。⁽⁶⁹⁾ シヨ一師が軽井沢で「避暑」したという明治一九年夏はまさにその看護の最中であって、言葉とおりの避暑を楽しめるような家庭環境ではなかったことは明らかである。しかも五月まで上司ともいうべきピカステスが同居していたの

であるから、家族の負担も大きかったろう。こうした厳しい家庭環境の中で、シヨ一師が単身軽井沢に来たのは、何らかの任務を帯びていた可能性が大と思われる。ただし軽井沢周辺でのこの時期、布教した痕跡は認められないから、これはない。なおR・D・M・シヨ一が家族の内でも最初に軽井沢に来たとの言説は、先のN・R・シヨ一の文章と矛盾するが、春の軽井沢訪問は短時日であったろうから、本格的に軽井沢で過ごしたのは彼だったと解釈すれば、大きな矛盾はないと考える。⁽⁷⁰⁾

四 シヨ一師恩人説の根拠、別荘の建築

佐藤孝一は「避暑地としての軽井沢を……あまねく内外に……紹介した功績は当然シヨ一氏に帰さねばならぬ」、「軽井沢の恩父」とまで仰がるに至った⁽⁷¹⁾、とシヨ一師こそが最大の功績者であると強調している。またディクソンもシヨ一師と同時期に避暑を開始したと記しているが、なぜ功績者が彼でなくシヨ一師なのか説明がない。佐藤不二男は「現在の軽井沢を語る時、シヨウ氏なくして軽井沢はあり得なかった⁽⁷²⁾」とまでいう。坪谷は「軽井沢をして今日あらしめた功労は、第一はディクソン教授、次はシヨ一牧師で……」と記している。文脈から見ると単にディクソンが先に軽井沢に来たのををもって第一の功労者としている

ようである。フィリップスも「(軽井沢の繁栄は)シヨ一氏に負う所が頗る多い」とする。⁽⁷⁴⁾これらの書籍、雑誌はシヨ一師が死亡して約一〇年後の、未だ記憶の浅い内に刊行されている。なお当のシヨ一師自身は軽井沢での避暑開始の事情を語っていない。白井によれば、膨大な数の彼からの手紙が現在もロンドンの宣教団体に保管されているが、軽井沢を語ったものは見たことがないという。⁽⁷⁵⁾

軽井沢村民と別荘民の有志は、シヨ一師死亡の直後から、シヨ一師の功績を称える顕彰碑を建立する動きを始めていく。軽井沢の人々がデイクソンよりもシヨ一師に大きな恩義を感じていたのは確かなことなのである。

シヨ一師の軽井沢での業績は別荘を初めて建てたこととされるから、これを追求する以外にそれを確かめる術がない。佐藤孝一によればシヨ一師は先ず明治一九年に高林董平の居宅を借り受けた。⁽⁷⁶⁾これを後に買い求め、町の東端(正確には東北端―著者注)、聖公会の軽井沢基督教会の傍に建てた(移設した―著者注)とあり、最初に借り受けた際の建物は宿場の中央付近だったのである。小林治夫は祖父の言としてシヨ一師が現在の観光会館の裏、今はない青樹医院附近の家を借りて避暑を送っていたとする。⁽⁷⁷⁾これは脇本陣・「佐忠」の敷地にあたると思われ疑問も残るが、ここが最初に借りた高林の居宅であった可能性が高い。佐藤孝

一は借り受けた家を「最初の家」と呼び、宿場の北東端に移設してからようやく「別荘」と見なしている。あくまで所有権あつての「別荘」だったのである。明治二一年に至り、シヨ一師は他に先駆けて最初の別荘を大塚山の頂に建築したとする。佐藤不二男はこの建築を旅宿「おもだかや」の移設と補足している。なお先の基督教会は、昭和五年以降、「シヨ一記念礼拝堂」と呼ばれているが、以下、単に「基督教会」とする。

R・D・M・シヨ一の別荘建築の経緯に関する言は、佐藤孝一と異なる。借り受け住宅については一切言及せず、シヨ一師は明治一九年に自身の建てた別荘(元々旅宿であつたのを移設)に最初から住んだとする。場所は後の基督教会の前のあたりであり、善光寺詣りの巡礼がその別荘を巡礼宿と間違えて戸をしきりに叩き、煩わしいので再び旅宿を手に入れ、大塚山に移設し二番目の別荘とした。つまり佐藤孝一は、シヨ一師が最初に建てた別荘は、明治二一年の大塚山別荘とするのに対し、R・D・M・シヨ一はそれは二番目の別荘であつて、最初の別荘は明治一九年に建てた礼拝堂前の建物とするのである。その最初の別荘も元々旅宿であり巡礼宿に間違えられたということは、二階建てであつたことを意味する。

穴戸は残された写真に基づき、最初の別荘は、高林の居

宅を宿場の北のはずれに移設したものと第三の説を主張している。その写真はハガキに印刷されたものであって、遠景にはまぎれもない愛宕山が見え、その角度から「最初の別荘」の位置は宿場の内部や大塚山でもなく、基督教会の周辺と見て間違いない。写っている家は平屋であって、R・D・M・ショーが示唆する二階建てではない。写真の下には“First house occupied by a Foreigner Archdeacon Shaw 1886”⁽⁷⁸⁾とある。また佐藤孝一は平屋を別荘化したのは大塚山別荘より後とするが、写真には明治一九年とある。

表1 ショー別荘建築経緯の諸説

明治	佐藤孝一	ショー三男	宍戸実
19	借家	第一号別荘 (二階建、教会前)	第一号別荘 (平屋、教会脇)
20			
21	第一号別荘 (二階建、大ヶ塚)	第二号別荘 (二階建、大ヶ塚)	第二号別荘 (二階建、大ヶ塚) 第一号別荘移築 教会脇
22			
23	第二号別荘 (平屋、教会脇) (時期は不明記)	第一号別荘移築 教会脇 (時期は不明記)	

て辿っており、宍戸も約一〇〇年後の推測である。共に佐藤孝一の文献に大きく依存しているはずである。似た結論が出るのは当然ともいえる。それにもかかわらず相違が見られることにここでは注意したい。背後に大きな思い違があることを暗示しているのではないか。実は、後に発表を予定している「別荘地・軽井沢の発展過程の研究」その四―ショー師の眞の業績―論文で明らかにするが、ショー師が建築した別荘―これには保養所の類を含む―は四軒だったという根拠がある。これまでショー師が建築した別荘は二軒であって、それも一軒に不都合が発生、仕方なく二軒目を建築したとされてきた。要するにショー師はあくまで自らの家族のために別荘を設けたとされてきた。しかしショー師が四軒を建築したとなるとこの前提を根底から疑ってかからねばならない。そしてこのことはショー師の業績の再評価につながるはずである。

註1 例えば「軽井沢町まちづくり基本条例」に「軽井沢町は、

雄大な浅間山にいだかれ、緑豊かな自然に恵まれた高原のまちです。明治一九年（一八八六年）にカナダ生まれの英国聖公会宣教師アレキサンダー・クロフト・ショー氏によって、避暑地として内外で紹介されて以来、国際保健休養地としての歴史と文化を育んできました」とある。

2 小林收、一九九九、『避暑地 軽井沢』樺、四一頁

- 3 江川良武、二〇一五、「別荘地・軽井沢の発展過程の研究 その一」、『信濃』、第六七卷第八号、五七五頁
- 4 佐藤不二男、一九七六、『軽井沢物語』軽井沢書房、六三頁
- 5 穴戸実、一九八二、「A・C・シヨオの来歴とその建築の研究(Ⅱ)」、嘉悦女子短期大学研究論集No.・二六(一)、五三頁
- 6 前掲4、六九頁
- 7 前掲4、六五頁
- 8 メアリー・フレイザー、一九八八、『英国公使婦人の見た明治日本』、淡交社、二五二頁
- 9 牛山雪鞋、一九八〇、『キリスト教信越伝道史』銀河書房、一〇八頁
- 10 前掲8、一二二頁
- 11 "Shaw's fault is that he is rather too exclusive, he likes to keep to himself and to keep his Christians separate. He hardly opens his heart to others as he might do, and does not join with other missionaries as he might."
- 12 日本聖公会歴史編集委員会／編、一九七四、『あかしびとたち…日本聖公会人物史』日本聖公会出版事業部、一二頁
- 13 Samuel Bickersteth, 1899 "Life and Letters of Eduard Bickersteth", M. A. Sampson Low, Marston & Company, London, p.77
- 14 前掲13、七八頁、一〇一頁
- 15 前掲13、一三四頁
- 16 斎藤功、一九九四、「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根…明治期を中心に」、筑波大学人文地理学研究、第一八巻、一八号、一三三—一六一頁
- 17 稲垣勉、二〇〇七、『研究対象としてのヒル・ステーション』、交流文化、第六巻、特集 ヒル・ステーション、アジアの高原リゾートと観光研究の可能性、立教大学観光学部、六頁
- 18 白井堯子、一九九九、『福沢諭吉と宣教師たち』、未来社、六九頁
- 19 大江満、二〇〇五、「宗教的植民地化の断章—在日英米聖公会主教管轄権問題」、日本研究30集、国際日本文化研究センター、五一—七八
- 20 佐藤孝一、一九二一、『からいぢわ』教文館、四六頁
- 21 前掲4、七〇頁
- 22 軽井沢町、二〇〇六、『軽井沢町町勢要覧、保健休養地一二〇年記念誌』一一頁、「シヨは友人の宣教師たちにも軽井沢は絶好の保養地だと紹介し、次第に別荘が建ち始めます。日本の猛暑に閉口していた彼らにとって、軽井沢は夏のバカンスを過ごす格好の避暑地となったわけです。」
- 23 アーネスト・サトウ、庄田元男訳、一九九二、『日本旅行日記2』東洋文庫、三〇九頁
- 24 Ernest Mason Satow and A. G. S. Hawes, 1884, "A Handbook for travellers in central & northern

- Japan: being a guide to Tokio, Kioto, Osaka, Hakodate, Nagasaki, and other cities, the most interesting parts of the main island, ascents of the principal mountains, descriptions of temples, and historical notes and legends" Murray
- 26 長坂契那、二〇一〇、「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」、社会学研究科紀要、第六九号、慶応大学、一〇二頁
- 27 坪谷水哉、一九二三、「軽井沢の今昔」、太陽、九月号、一一〇頁
- 28 アーネスト・サトウ、荻原延寿編、二〇〇〇、『遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄 九』三四〇〜一頁
- 29 アーネスト・サトウ、庄田元男訳、一九九二、『日本旅行日記一』二八六頁
- 30 アーネスト・サトウ、庄田元男訳、一九九二、『日本旅行日記二』三〇七〜八頁
- 31 前掲30、三〇七〜八頁
- 32 武内博、二〇〇七、「来日西洋人研究」<http://rainichi.20072.blog106.fc2.com/blog-date-200707.html>より判断
- 33 古関恒雄、一九八六、「東京大学医学部の少壮エリート教師たち―デーニツ、ティーゲル、ディッセー医学近代化と外人たち」、一六、臨床医学、二二巻、八号、世界保健通信社、一〇五〜一二頁
- 34 瀧井一博、二〇〇一、「帝国大学体制とお雇い教師カール・ラートゲン―ドイツ国家学の伝道―」、人文学報、第八四号、京都大学人文科学研究所、二一九〜二四六頁
- 35 信濃毎日新聞、昭和十一年八月八日付
- 36 アーネスト・サトウ、荻原延寿編、二〇〇〇、『遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄 七』二四八頁
- 37 F・V・ディキンス、一九八四、『パークス伝 日本駐在の日々』高梨健吉訳、平凡社、一六〇頁、同書では夫人も同行したことになっているが、長期休暇のため日本を離れていたから、公使のみの登山とした。
- 38 北軽井沢ブルーベリーYGH、二〇一六、「軽井沢の歴史・二六」<http://history.kaze3.cc/his-26.htm>
- 39 六戸實、一九八七、『軽井沢別荘史』住まいの図書館出版局、四八頁
- 40 J. H. Sandwith, 1871, "A trip into the interior of Japan: being the journal of from the 20th August to the 20th September" Japan Gazette, p71-72
- 41 ジョン・レディー・ブラック、金井圓、広瀬靖子／編、一九六八、『みかどの都「ザ・ファーンイスト」の世界』桃園社、二五九〜六〇頁
- 42 クリフイス、山下英一訳、一九八四、『明治日本体験記』平凡社、三二七頁
- 43 Leon Descharmes, 1882 "Itinerary of a Journey from Yedo to Kusatu, with Notes upon the Waters of Kusatu, Asiatic Society of Japan. "Transactions" Vol. 2, p23-48
- 44 前掲30、三〇九頁

- 45 D. H. Marshall, 1876, "Notes of a Trip from Yedo to Kioto VIA Asama-Yama, The Hokurukudo, And Lake Biwa, Asiatic Society of Japan" Transactions, Vol.4, p159-162
- 46 石山洋、フォッサマグナミュージアム編刊、二〇〇五、『資料集「ナウマン博士メモータブック」』一五頁
- 47 E. G. Holtham, 1883, "Eight Years in Japan" Kegan Paul Trench & Co., p160-168
- 48 レスリー・ハーバート・ガスタ、パトリック・ノット、宇佐美竜夫監訳、一九八二、『明治日本を支えた英国人―地震学者・ミルン伝』日本放送出版協会、九五頁
- 49 前掲48、九五頁
- 50 ノルデンショルド、小川たかし訳、一九八八、『ヴェガ号航海記(下)』フジ出版社、三三九頁
- 51 A・H・クロウ、岡田章雄・武田万里子訳、一九八四、『日本内陸紀行』雄松堂出版、一五四頁
- 52 宮崎正明、一九九五、『知られざるジャパノロジストローエルの生涯』丸善、一二二頁
- 53 ヘンリー・S・パーマー、樋口次郎訳、一九八二、『黎明期の日本からの手紙』筑摩書房、一九一―二八頁
- 54 ギュスターヴ・グダロー、井上裕子訳、一九八七、『仏蘭西人の駆けある記―横浜から上信越へ―』まほろば書房、一八二頁
- 55 渡辺京二、一九九八、『逝きし世の面影』葦書房、一―四七八頁
- 56 A・H・バウマン、二〇一七、『外国人のロクス・アモエヌス「箱根」―明治・大正の旅行記から―』BookWay、一―一四三頁
- 57 伊藤久子、二〇〇『明治時代の外国人内地旅行問題―内地旅行違反をめぐる―』、横浜開港資料館紀要一九、四五頁
- 58 前掲20、四二頁
- 59 Norman Rymner Shaw, 1991, "Norman Rymner Shaw, The Diaries of his Life in Japan and China from 1888 to 1932, Volume I-Early Years to 1913" Edited by Alexandra Grandy, p8
- 60 R. M. D Shaw, 1959, "Karuzawa and Archdeacon Shaw", "Japan Mission" Autumn, アメリカ聖公会 (PEUSA) 駐日代表部発行、一〇頁
- 61 穴戸実、一九八四、『A・C・シヨオの研究(出自と日本赴任)』、嘉悦女子短期大学研究論集No.27(3)、四三頁。
- 62 宮原安春、一九九一、『軽井沢物語』講談社、六〇頁
- 63 ミス・フィリップス、一九二二、『軽井沢』、現代世界思潮、警醒社、一九八頁
- 64 江川良武、二〇一五、『別荘地・軽井沢の発展過程の研究 その二』、『信濃』、第六七巻第九号、六八四頁
- 65 ヒューブナー、市川慎一、松本雅弘訳、『一九八八、オーストリア外交官の明治維新―世界周遊記(日本編)』新人物往来社、六〇頁
- 66 前掲56、七頁

- 67 前掲20、七一頁
 - 68 前掲59、八頁
 - 69 前掲61、四三頁
 - 70 明治一九年といえはR・D・M・シヨイは三歳、N・R・シヨイは八歳である。共に年代を記憶しているとは思えず、母親などから後年聞いたに違いない。N・R・シヨイは英國で学ぶため一四歳より親元を離れたが、R・D・M・シヨイは結婚まで母親と共にあったから、思い出話などより多く聞いたはずである。
 - 71 前掲20、四七頁
 - 72 前掲四、六五頁
 - 73 坪谷水哉、一九一三、「軽井沢の今昔」、太陽、九月号、一一〇頁
 - 74 前掲63、一九八頁
 - 75 前掲18、六八頁
 - 76 前掲20、四六頁
 - 77 小林治夫、一九九七、『青崩峠』近代文芸社、二二六頁
 - 78 前掲5、五四頁
- (エがわ・よしたけ 長野県軽井沢町長倉二六三―二四)

雑誌関係要目(七)

- 國學院雑誌(二二八二) 國學院大學
 - クオリアの問題を物理主義は解決できる
 - のか……………金杉 武司
 - ドイツ現代文化横断 ―小説、映画、ポツ
 - プ・ミュージック……………六戸節太郎
 - △研究ノート△
 - 源氏物語「あらはになといたせて」考
 - ……………近藤 政行
 - △座談会△
 - 江戸語・東京語から首都圏方言へ
 - ……………岩橋 清美
 - ……………久野マリ子
 - ……………シユテファン・カイザー
 - ……………御園生保子
- △談話室△
 - 異文化理解と京劇……………波多野真矢
 - △書評△
 - 花澤哲文著『高山樗牛 歴史をめぐる芸術と論争』……………山本 良
 - 國學院雑誌(二二八三) 國學院大學
 - 「杜撰」語源考……………呉 鴻春
 - 藤林普山『和蘭語法解』における格理解……………服部 紀子
 - 松戸徳川家伝来美術品の機能と価値
 - ―調度品・日用品の分類と水戸徳川家御製品を中心に……………小寺 瑛広
 - △談話室△
 - 「金輪御造管差図」の合理性 ―出雲大社
- (司会) 三井はるみ 諸星美智直
 - 大遷宮にご奉仕しての所感……………西岡 和彦
 - △書評△
 - 大津直子著『源氏物語の淵源』……………有馬 義貴
 - 信州農村開発史研究所報(二二六・二二七)……………信州農村開発史研究所
 - 村落を生きる……………Y 子
 - 明治期長野県における就学拒否……………齋藤 洋一
 - 地方史研究(三六八) 地方史研究協議会
 - △会告△
 - 第55回日本史関係卒業論文発表会について
 - 第65回大会を迎えるにあたって
 - 第65回大会に向けて 問題提起募集のお知らせ